

住吉歴史資料館だより



大正初期 (すもう松 昭和2年、国道2号線の開設時にとりはらう)



平成2年6月



本住吉神社のご鎮座千八百年事業の一つとして住吉歴史資料館を開設しております。

このたび横田宮司家に伝わる近世古文書等の整理に着手致しました。急速に世の中が変わる中、住吉の各家に伝わる資料や、言い伝え、また阪神大震災の記憶、復興への懸命の努力などを地域の人々のお聞きし、記録して伝えていく計画を持っておりま。

神戸大学地域連携センターの先生方にもご協力頂き取り組んで行きたいと考えております。

しかしながら、これらは作業の一面を述べているにすぎません。本当の主旨は、ここに住む人達が生き生きと日々の暮らしを続けることのお手伝いをする事にあります。

歴史を知る。例えば、神社正面鳥居前の歩道は西国街道の名残りであり、大名たちが参勤交代で江戸に向かった道です。

横田宮司家の新築座敷で休憩し、朝ごはんを召し上がった殿様もおられます。歴史を知ることにより、毎朝の六甲山や住吉川、それに埋め立てて今は遠くになってしまった「ちぬの海」大阪湾の眺めがきつと昨日と違ったものになります。

それを親が子供達に伝え、誇りと愛着を持って住み続けたいと思つまち、まさに、住みよい街、「すみよし」になるようにお手伝いしたいと願っております。

創刊にあたって

財団法人

住吉学園

理事長

本田 隆志

住吉歴史資料館ご案内

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ がコピーです。

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。関係文書、記念物、言い伝への収集。
2. 展示物のメンテ。展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画してみんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。成果の発表。



展示室



元文4年(1739)鳥取藩主の池田吉泰公が参勤交代の途中休憩し、朝御飯を召し上がった座敷(復元)

お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

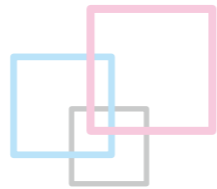
1. 各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗 など。
2. 各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
3. 各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車(いわゆる“馬力”)の道具類などの労働具。
4. 古い写真(近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など)、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5. 災害時の記録や写真。(阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など)
6. 戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7. だんじり、住吉祭の写真。(渡御、宮入、宮出し など)

これは一例です。どんなものでも捨てる前に資料館に相談して下さい。貴重な発見があるかも知れません。寄託(資料館でお預かりする)、寄贈(資料館に頂く)等、適切な処置を行います。文化財であるとともに個人情報としても適切に取り扱います。

また、長年住吉に住んでこられた方々に気軽にむかし話をさせていただくことも考えています。ああ、あの人なら、住吉のこと“よお知ってはる”、という方をご紹介下さい。

資料館の開館日は毎週木曜日の午前中です。
また、別途、日曜日は展示室を開館しています。(奉賛会の委員の方がお世話)、そして、資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。次回は11月8日(日)です。

神戸大学大学院人文学研究科 地域連携センター



私は、このような歴史的に作られていった人々の関係を知り、地域についての認識を豊かにすることが大切であると考えています。コミュニティの基礎がいかに形成されてきたのか、それぞれの

薪でご飯を炊き、お風呂に入る。生活の中に牛の姿がある。これらは千年単位で私たちの暮らしの基本をなしていたものです。一九六〇年代の高度経済成長以降、このような暮らしのあり方は大きく変化しました。薪を使うことはなくなり、牛の姿もありません。いまの四〇才以下の方々にとって、それは歴史で学ぶものとなっていきます。江戸時代から明治に生きた福沢諭吉は、自分は二つの異なる世界に生きてたと述べていますが、現在、六〇才以上の方々は、福沢以上に社会の深いレベルで、二つの世界を生きているといっているように思えます。住吉地域でも、この五〇年の変化はさまざまのものと伺っています。

奥村 弘

住吉
住吉歴史資料館
住吉歴史資料館
住吉歴史資料館

住吉歴史資料館は神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの協力を得て活動しています。



住吉歴史資料館での古文書撮影の様子



佐用町水害被災資料調査 (中央が奥村)



阪神淡路大震災後の資料救出活動の様子

時代にはいかなる課題があったのかを把握することは、コミュニティの未来を考える基礎となるからです。とくに高度経済成長以前の生活を知る人たちが、次の世代に自分たちの経験を引き継ぐことができる最後の機会である今だからこそ、このことの重要性はいつそう強まっています。

このような中で、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい」という目的をもって住吉歴史資料館の活動が始められ、毎週一度の開館、住吉村関係の歴史資料収集と整理、住吉歴史資料館だよりの発行などが行われることになったことは、素晴らしいことであると考えます。

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターは発足から七年、県下各地で歴史文化事業を、歴史文化の専門家の立場からサポートして参りました。本学と住吉地区とはご近所の間柄でしたが、これまで継続した連携関係はありませんでした。今回、住吉歴史資料館の活動に私も参加させていただくこととなりました。地域歴史文化の担い手の一員として、大学がその役割を果たす上で、この連携は極めて重要であると考えております。住吉地区、しいては灘・東灘地域の地域歴史文化をより豊かにしていくために、持続的な連携を進めたいと考えております。ご協力の程よろしく申し上げます。

小学生・中学生のみなさんへ — 私たちのふるさと住吉 —

うはら住吉のこと

JR住吉駅を中心に六甲山から大阪湾にかけての私たちの町は、「うはら住吉」と呼ばれていました。漢字で書くと兔原または兔原と書きま

す。海に關係の深い住吉神社が祀られていることから、うはらは、海原かな、また、漢字から考えて兔が飛び跳ねていた野原かなと言われている。さて、どうでしょうか。



でも、野原であったのは確かのようにす。緑の山があり、青い海がある。その間を広々とした野原が続ぎ、きれいな住吉川がながれ、村中に住吉川から引いた綺麗な水路がいくつも流れていました。中心には住吉神社の森があります。春には山麓には黄色い菜の花が咲き乱れ、その菜種油を絞る水車が回っていました。また、春夏秋冬、六甲や摩耶山に沈む夕日は今よりもずっとずっと美しく思わず両手を合わせたくなる「おてんとうさま」であつたらしいです。

住吉神社は正式には本住吉神社といい、穢れをはらい、きれいなこと、美しいことを私たちに与えてくれる神々でいらつやいます。

美しい山、きれいな海、そしてきれいな水。そのような環境があるからこそ本住吉神社の神様たちがよるこんでここに鎮座し、きれいな心、美しい町を守って頂けることもわかる気がします。

相撲の仕切りでまく塩、お清めの時にまいたり、置いたりする塩も、この神様たちになんていいます。わたしたちの住吉の沖

の海水から取る塩が、もっとも純粋で清らかな塩なのです。知らなかったでしょう？ このような素晴らしい土地に私たちは住んでいます。

そして、このような土地だからこそ古代から多くの人がここに住み、歴史を刻んでいます。渦が森銅鐸、求女塚をはじめ多くの古墳、縄文弥生の遺跡がそれを物語っています。

近代では日本経済を動かした人々が多くの屋敷を構えました。

摂津国免原郡住吉村、兵庫県武庫郡住吉村、〒658 神戸市東灘区住吉、と呼び方は変わっていますが、それぞれの時代のいろいろなことを住吉歴史資料館はみなさんにご紹介して行きます。皆さんがますます住吉が好きになるようにお手伝いします。

東灘区民センターは、「うはらホール」といい、東灘警察署では優秀な警察官を表彰するときに「うはらの守り賞」を与えます。

うはら住吉。皆さんは好きになれそうですか？



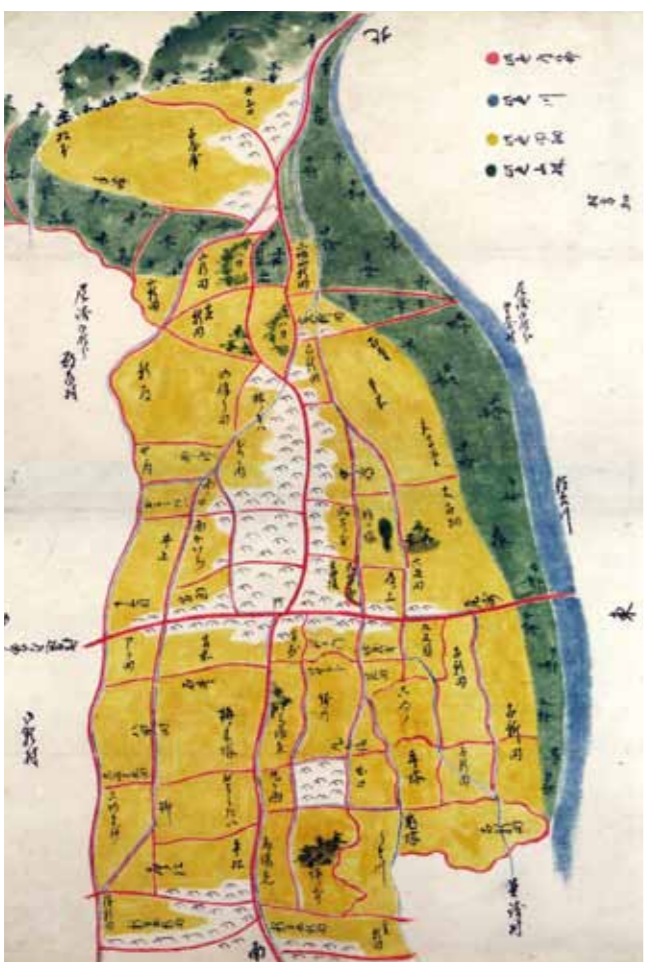
江戸時代の住吉へ 摂津の国免原郡住吉村

木村 修二

江戸時代の住吉村の地図

住吉歴史資料館には、おおくの古文書とともに、江戸時代の住吉地区のようすをえがいた何枚もの地図（絵図）が収蔵されています。今回はその中のひとつを紹介しながら江戸時代の住吉村の景観を眺めてみましょう。

この地図がつけられた時期は、残念ながらはつきりわかりませんが、おそらく、江戸時代のなかばの明和六年（一七六九）以降に描かれたものとかんがえられます。その理由は、絵図の両はしの北（図上）寄りにそれぞれ「尼崎御領分野寄村」「尼崎御領分郡家村」と書いてあり、南（図下）寄りには「魚崎村」「御影村」と見えますが、野寄と郡家に特に「尼崎御領分」つまり尼崎藩の所領であることの表示がなされているのに対し、魚崎と御影に肩書きがないのは、両村が住吉村と同じ幕府領（天領）であることを示しています。こうしたかたちは、それまで尼崎藩領だった魚崎村や御影村を含む海沿いの村々が、明和六年に幕府によって上知（所領が幕府に取り上げられること）されて以降の姿だからにほかなりません。



江戸中期の古地図（住吉村）

なお絵図の大きさは、タテ四〇サ、ヨコ二八サとそんなに大きくはありません。

この絵図が描かれている範囲は、北は現在の山田区の北側あたりから、南は呉田区の集落あたりまで、海は描かれていません。東は住吉川、西は御影町との境目までです。江戸時代の住吉村の範囲は、この絵図のさらに北、六甲山の山中にまで及んでいましたが、その部分はこの絵図で描く対象からははずされています。

この地図が描かれた目的も、いまのところくわしいことは不明ですが、田畑や道筋、川（用水路）、山林などが色分けされて描かれ、土地の名前（小字・坪名）がこまかく書きこまれていることから、単純に、描かれた当時の住吉村のすがたを图示することが目的だったのかもしれない。ただ、六甲山中が描かれていないことから、農耕地と集落（村の家のみ）を中心に村人が日常的に生活している範囲だけを描こうとしていたことがうかがえるのではないのでしょうか。

図の中には、白地に屋根だけを描いて集落が表現されています。集落は、北の山田区あたりに点在し、南方の呉田区とその北側に住之江区の集落が描かれています。住吉村の中心集落は中央部に広く描かれたあたりということになるとおもいます。この絵図の中央部に鳥居を描くことで神社（本住吉神社）が表現されていますが、寺院は描く対象からは外されています。

また、いまではうしなわれた風景が描かれているのもこの地図の特徴です。図の下のほうに「塚ノ本」という字名が見えますが、その上に小さな森のようなものが描かれており、たいへん見えにくいのですが「乙女塚」と書きこまれています。これは、いまは公園になっている東求女塚古墳にあたります。今からおおよそ一六〇〇年前につくられたこの古墳は、残念ながら明治時代のはじめに大部分が失われてしまいました。おなじように図の中央部やや右寄りに「坊か塚」という字名が見え、その右横にタテ長の古墳のすがたが描かれています。字名だけみればほかに「梅ノ木塚」や「平塚」「鬼塚」のように、住吉村にはおおくの古墳（塚）が点在していたことがみてとれます。住吉村の古墳の話はまたべつの機会にくわしくいたしましょう。

いまは宅地となっていますが、むかしの住吉川の右岸（西側）は川に沿って帯状に林が続いていたことがわかります。これらの林は、「反高林」や「観音林」と呼ばれ、マツを中心とする雑木林でした。古くから洪水の多かった川のそばには家を建てたり田畑を拓いたりすることは難しく、また危険でもあったので、絵図が描かれた当時はほとんど放置された土地だったのです。



文字を読みやすくした古地図
中心の鳥居が本住吉神社

図の上の方「北」という字が逆さまに書かれてあるあたりから、図の斜め右の方向へ延びる青色で描かれた住吉川とは別に、少し見えにくいのですが、真下か左斜め下のほうへ向かって赤色の線とそれを挟むように細い青色の線が延びています。この青い線は、田んぼで稲を植えるのに必要な水を川から引くための用水路をさしています。いまの住吉地区のようすからはまったく想像できませんが、黄色に塗られているのはすべて田んぼか畑で、このうち多くが稲を植える田んぼだったと考えられます。よくみると黄色の田畑の間を縫うように青色の用水路が描かれています。むかしの人は水が引ける限りどんな田んぼを拓いてゆき、そこで米を作っていました。田んぼで稲作をおこなうところにとって、水はたいへん貴重なものでした。水源の住吉川がわりあい水量の豊富な川だったためか、住吉村周辺ではさほどではありませんでしたが、ほかの地域では時に暴力を伴うような水争いをするこもしばしばでした。こうした水をめぐる話もまたべつの機会にしたいと思います。

赤い線は道路です。道路といっても自動車のない時代ですから、それほど幅広い道はなく、せいぜい牛がひっぱる荷車が通れる程度だったでしょう。図の中央部を東西に横切っている赤い筋は、左側に「往還道筋」と書かれているように、当時の代表的な幹線道路の一つだった「西国街道」です。むかしはこの道を多くの旅人が往来し、時には大名行列なども通ることもありました。本住吉神社の門前付近は街道に沿って何軒もの「茶屋」が軒を並べていて、時には大名が休憩のために立ち寄ることもありました。住吉歴史資料館には、大名が休憩した本住吉神社の社家宅の座敷が復元されています。

図中に記されている字名のなかに、「何々新田」という表現がなされたものがいくつもあります。これらは、文字通り新たに拓かれた田んぼなのですが、厳密に言えば、江戸時代の初めごろにおこなわれた検地（年貢高を確定するために領主によっておこなわれた土地の面積測量や、土地の持ち主を確定する調査のこと。）によって、田地として「検地帳」とよばれる帳面に登記されて以降に開発された田地を「何々新田」と呼びました。「古新田」という場所などは、そうした新田の中でも比較的古くに開発されたものということになるでしょう。「亥新田」や「寅新田」というのは、干支の亥の年、寅の年に拓かれた田地です。「新兵衛新田」というのは、恐らく新兵衛という人が拓いた田んぼと思われる。この話もまた別の機会にくわしくのべます。

図中の中央部やや東寄り住吉川右岸の林（反高林）の西側に「古寺」「寺前」「宮守堂」など寺院に關係する字名が見えます。この絵図の頃にはすでに存在していないのですが、はるかむかし観音林のあたりには「慈明寺」という大寺があったと伝えられており、一六世紀初めに発生した「慈明寺流れ」と呼ばれる大洪水によって堂塔伽藍が悉く流されてしまったと伝えられています。これらの字名はあるいは、その名残なのかもしれません。「宮守堂」というのは、神社の管理をするための仏教施設です。奈良時代から明治時代の始めまで仏教と神道とは「神仏習合」という考え方によって一体化していましたが、神社はしばしば仏教の僧侶によって管理され、逆に寺の境内に神社が建てられることは決して珍しくありませんでした。



住吉村役場で使用していた地図

図のやや北寄りに「ハカ」が二ヶ所描かれています。いうまでもなくこれは墓所のことです。このうち北側の墓所は今でもある小林墓地ですが、南側の墓所はかつて「小墓」と呼ばれたもので現在は移転しています。本住吉神社の東側から北へむかつて有馬街道が伸びていますが、現在の山手幹線道路との交差点（「室ノ内」交差点）を北に二〇三〇メートル入ったあたりが分かれ道になっていて、その分岐点に現在「極楽橋跡」と刻まれた石碑が建てられています。この極楽橋とは、有馬街道から道を外れて「小墓」へ向かう分岐点にかつてあった用水路を渡る橋でした。俗世間から死者の世界（極楽浄土）への入口に掛けられた橋ということでこのような名前が付けられたのかもしれませんが。

図の南寄り住之江区の集落を囲むように「堀ノ内」「丸か西」「丸か後」「出口」「馬場東」「馬場先」という字名が見えますが、これらはいずれも江戸時代よりもさらにむかしの中世という時代に、土地を治めた領主の館跡にしばしばみられる字名です。詳しいことはまったく知られませんが、あるいは現在の住之江区の集落付近には、中世にこの土地を支配した豪族の館があったのかもしれない。また図の北寄り、山田区集落の西側にも「古屋鋪」という字名があり、あるいはこのあたりも中世以前の豪族の館跡なのかもしれません。

絵図について語ると話は尽きませんが、今回紹介した住吉村絵図は、描かれた当時のことを示すと同時に、それより以前の景観をも読み取ることができ、今後もこうした絵図や古文書などをすこしずつ紹介していくとともに、今回紹介したそれぞれの記事についてもさらに内容を深めて、別の機会に述べてゆきたいと思えます。